

3/12 Wed.

第646回 定期演奏会  
サントリーホール 19時開演  
SUBSCRIPTION CONCERT No.646 / Suntory Hall 19:00

3/15 Sat.

第680回 名曲シリーズ  
サントリーホール 18時開演  
POPULAR SERIES No.680 / Suntory Hall 18:00

指揮  
Principal Conductor

**セバスティアン・ヴァイグレ** (常任指揮者) -p.5  
SEBASTIAN WEIGLE

合唱  
Chorus

**新国立劇場合唱団** -p.12  
NEW NATIONAL THEATRE CHORUS

ヴォツェック (バリトン)  
Wozzeck (Baritone)

**サイモン・キーンリーサイド** -p.7  
SIR SIMON KEENLYSIDE

子供たち  
Children

**TOKYO FM 少年合唱団** -p.13  
TOKYO FM BOYS CHOIR

鼓手長 (テノール)  
Tambourmajor (Tenor)

**ベンヤミン・ブルンス** -p.7  
BENJAMIN BRUNS

音楽総合アシスタント、  
稽古ピアノ、合唱指揮  
Music Assistant,  
Korrepetitor, Chorusmaster

**富平恭平** -p.12  
KYOHEI TOMIHIRA

アンドレス (テノール)  
Andres (Tenor)

**伊藤達人** -p.8  
TATSUNDO ITO

コンサートマスター  
Concertmaster

林 悠介  
YUSUKE HAYASHI

大尉 (テノール)  
Hauptmann (Tenor)

**イェルク・シュナイダー** -p.8  
JÖRG SCHNEIDER

医者 (バス)  
Doktor (Bass)

**ファルク・シュトルックマン** -p.9  
FALK STRUCKMANN

ベルク  
BERG

**歌劇〈ヴォツェック〉** 作品7 (演奏会形式)  
[約95分] -p.16

マリー (ソプラノ)  
Marie (Soprano)

**アリソン・オークス** -p.9  
ALLISON OAKES

Wozzeck, op. 7 (Concert Style)

第一の徒弟職人 (バス)  
1. Handwerksbursch (Bass)

**加藤宏隆** -p.10  
HIROTAKA KATO

第二の徒弟職人 (バリトン)  
2. Handwerksbursch (Baritone)

**萩原 潤** -p.10  
JUN HAGIWARA

白痴 (テノール)  
Der Narr (Tenor)

**大槻孝志** -p.11  
TAKASHI OTSUKI

マルグレート (メゾ・ソプラノ)  
Margret (Mezzo Soprano)

**杉山由紀** -p.11  
YUKI SUGIYAMA

兵士、若者 (テノール)  
Ein Soldat, ein Bursch (Tenor)

**榛葉薫人** (新国立劇場合唱団)  
YOSHITO SHIMBA (NEW NATIONAL THEATRE CHORUS)

舞台監督: 幸泉浩司 (アートクリエイション)

合唱稽古ピアノ: 古瀬安子

字幕: 増田恵子 (原訳: 河野俊行)

字幕操作: Zimaku プラス

※本公演には休憩がございません。あらかじめご了承ください。

\*No intermission

※当初の発表から、出演者が一部変更になりました。

主催: 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

助成: 文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術等総合支援事業 (公演創造活動))

文部科学省

独立行政法人日本芸術文化振興会

公益財団法人アフィニス文化財団 (3/12)



助成: 公益財団法人三菱UFJ信託芸術文化財団 (3/12)

公益財団法人 ロームミュージックファンデーション (3/12)

協力: アフラック生命保険株式会社 (3/12)

日本アルバン・ベルク協会

3/20 Thu.  
holiday

第140回 横浜マチネーシリーズ  
横浜みなとみらいホール 14時開演  
YOKOHAMA MATINÉE SERIES No.140 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

3/22 Sat.

第275回 土曜マチネーシリーズ  
東京オペラシティ コンサートホール 14時開演  
SATURDAY MATINÉE SERIES No.275 / Tokyo Opera City Concert Hall 14:00

3/23 Sun.

第275回 日曜マチネーシリーズ  
東京オペラシティ コンサートホール 14時開演  
SUNDAY MATINÉE SERIES No.275 / Tokyo Opera City Concert Hall 14:00

指揮  
Associate Conductor & Creative Partner

チェロ  
Cellos

特別客演コンサートマスター  
Special Guest Concertmaster

一柳 慧  
ICHIYANAGI

ソッリマ  
SOLLIMA

ソッリマ  
SOLLIMA

[休憩]  
[Intermission]

ベートーヴェン  
BEETHOVEN

鈴木優人 (指揮者/クリエイティブ・パートナー) -p.6  
MASATO SUZUKI

ジョヴァンニ・ソッリマ\*<sup>☆</sup> -p.14  
GIOVANNI SOLLIMA

遠藤真理 (読響ソロ・チェロ)\*<sup>☆</sup> -p.14  
MARI ENDO (YNSO solo)

日下紗矢子  
SAYAKO KUSAKA

オーケストラのための〈共存〉 [約6分] -p.21  
"Coexistence" for Orchestra

〈多様な大地〉 (日本初演)\* [約23分] -p.22  
Terra con Variazioni (Japan Premiere)

〈チェロよ、歌え!〉\* [約12分] -p.23  
Violoncelles, Vibrez!

交響曲 第7番 イ長調 作品92 [約36分] -p.24  
Symphony No. 7 in A major, op. 92  
I. Poco sostenuto - Vivace  
II. Allegretto  
III. Presto  
IV. Allegro con brio

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団  
助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術等総合支援事業 (公演創造活動))  
独立行政法人日本芸術文化振興会  
協力：横浜みなとみらいホール (3/20)

指揮

セバステアーン・ヴァイグレ  
(常任指揮者)

SEBASTIAN WEIGLE, Principal Conductor

ヴァイグレが振る  
衝撃の〈ヴォツェック〉



©読響

読響の常任指揮者となって6年目の集大成として、歌劇場で培った手腕を生かし、ベルクの〈ヴォツェック〉を指揮。昨年、東京・春・音楽祭でR. シュトラウスの〈エレクトラ〉公演を成功へと導いたヴァイグレがその先の世界を拓く。

1961年ベルリン生まれ。82年にベルリン国立歌劇場管の首席ホルン奏者となった後、巨匠バレンボイムの勧めで指揮者へ転身。2003年には、ドイツのオペラ雑誌『オーパンヴェルト』の「年間最優秀指揮者」に選ばれ注目を浴び、04年から09年までリセウ大劇場の音楽総監督を務め、評判を呼んだ。08年から23年夏までフランクフルト歌劇場の音楽総監督を務めて在任期間中には同歌劇場管が『オーパンヴェルト』誌の「年間最優秀オーケストラ」に、同歌劇場が「年間最優秀歌劇場」に度々輝くなど、その手腕は高く評価された。

読響には16年8月に初登場し、19年から第10代常任指揮者を務めている。近年もメトロポリタン歌劇場で〈ポリス・ゴドゥノフ〉、ウィーン国立歌劇場で〈ダフネ〉、バイエルン国立歌劇場で〈影のない女〉〈ローエン格林〉を指揮するなど、国際的な活躍を続ける。23年7月には、フランクフルト歌劇場の音楽総監督としての最後の公演でルディ・シュテファン〈最初の人類〉を振り、大きな話題を呼んだ。今年2月にはバイエルン国立歌劇場で〈ダナエの愛〉を指揮し絶賛された。これまでに、バイロイト音楽祭、ザルツブルク音楽祭のほか、ベルリン国立歌劇場、英国ロイヤル・オペラなどに客演。ベルリン放送響、ウィーン響、フランクフルト放送響などの一流楽団と共演を重ねている。

3/12  
定期

3/15  
名曲

Maestro

3/20

横浜マチネー

3/22

土曜マチネー

3/23

日曜マチネー

Maestro

指揮

**鈴木優人**

(指揮者/クリエイティブ・パートナー)

MASATO SUZUKI,  
Associate Conductor & Creative Partner**鮮烈なリズム****ベートーヴェン第7番**

©読響

クラシック音楽界を牽引する新時代の旗手・鈴木優人が、ベートーヴェンの交響曲第7番を指揮し、エネルギーに満ちた演奏を引き出す。

1981年オランダ生まれ。東京芸術大学卒業および同大学院修了。オランダ・ハーグ王立音楽院修了。指揮者として国内外の楽団と共演するほか、鍵盤楽器奏者としても活躍している。音楽監督を務めるアンサンブル・ジェネシスでは、オリジナル楽器でバロックから現代音楽まで意欲的なプログラムを展開している。

2018年にバッハ・コレギウム・ジャパン (BCJ) の首席指揮者に就任。BCJ オペラシリーズのプロデューサーを務め、20年のヘンデル〈リナルド〉は、バロック・オペラの新機軸として高く評価された。また、19年から世界的ヴィオラ奏者タメスティとの「バッハ・プロジェクト」を開始し、ヴェルビエ音楽祭など欧州各地で演奏。23年3～4月には、名門オランダ・バッハ協会に客演し、J.S. バッハ〈マイア受難曲〉(全13公演)を指揮。今年1～2月にはBCJとの欧州7公演を成功させた。

作曲家としても活躍するほか、13年から調布国際音楽祭のエグゼクティブ・プロデューサーを務め、NHK-FM「古楽の楽しみ」に出演するなど、活動は多岐にわたる。芸術選奨文部科学大臣新人賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞、渡邊暁雄音楽基金音楽賞など受賞多数。20年4月から読響の指揮者/クリエイティブ・パートナーとして多くの公演を指揮するほか、《読響アンサンブル・シリーズ》をプロデュースして好評を博している。23年4月から関西フィル首席客演指揮者。九州大学客員教授。



©Robert Workman

ヴォツェック (バリトン)

**サイモン・**  
**キーンリーサイド**

Sir SIMON KEENLYSIDE, Baritone

緻密な役作りと芸術性で世界各地の歌劇場で活躍する英国を代表するバリトン。マンチェスターの王立ノーザン音楽大学で研鑽を積み、ハンブルク歌劇場での〈フィガロの結婚〉アルマヴィーヴァ伯爵役でデビュー。以来世界各地の一流歌劇場の舞台に立ち、アバド、ティーレマン、ラトル、パッパーノ、カンブルランらの指揮でメトロポリタン歌劇場、ミラノ・スカラ座、英国ロイヤル・オペラ、バイエルン国立歌劇場、パリ・オペラ座などで歌い、ザルツブルク音楽祭にも出演。レパートリーは幅広く、〈ドン・ジョヴァンニ〉〈エフゲニー・オネーギン〉〈ヴォツェック〉〈ビリー・バッド〉〈マクベス〉〈リゴレット〉〈ハムレット〉の各表題役などで数々の名唱を残している。録音やDVDなども多数リリースしている。読響初登場。

オラトリオからオペラ、歌曲までジャンルを超えて世界の主要楽団や歌劇場で活躍するテノール。ドイツ出身。出身地ハノーファーの少年合唱団で声楽と出会い、ハンブルクで研鑽を積む。在学中にブレーメン歌劇場と契約し、その後ドレスデン国立歌劇場を経て、2010～20年、ウィーン国立歌劇場に所属。レパートリーは広く、〈後宮からの逃走〉ベルモンテ、〈魔弾の射手〉マックス、〈ローエングリン〉表題役などで成功を収めている。今シーズンは、バイエルン国立歌劇場に〈さまよえるオランダ人〉エリックで出演。ハンブルク歌劇場では〈パルジファル〉表題役でデビューの予定。今年5月にはバレンボイム指揮ベルリン・フィルとマーラー〈大地の歌〉を歌う。読響初登場。



©Sara Schöngen

鼓手長 (テノール)

**ベンヤミン・ブルンス**

BENJAMIN BRUNS, Tenor

3/12

定期

3/15

名曲

Artist

3/12

定期

3/15

名曲

Artist

3/12  
定期3/15  
名曲

Artist



アンドレス(テノール)

伊藤達人

TATSUNDO ITO, Tenor

リリックな声と幅広い役作りで活躍する気鋭テノール。東京芸術大学および同大学院を経て、新国立劇場オペラ研修所修了。文化庁在学研修員としてベルリンで研鑽を積む。2016年〈ナクソス島のアリアドネ〉ブリゲッタで二期会デビュー。若手テノールとして注目を集め、その後も〈魔笛〉や〈ヘンゼルとグレーテル〉、〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉などに出演。オペラ以外でも新国立劇場演劇制作ミュージカル〈パッション〉にトラツ中尉で出演したほか、コンサートではヘンデル〈メサイア〉、ベートーヴェン〈第九〉、オルフ〈カルミナ・ブラーナ〉などのソリストとして活躍。22年には〈パルジファル〉表題役でヴァイグレ指揮の読響と共演し、好評を博した。二期会会員。

3/12  
定期3/15  
名曲

Artist

幅広いレパートリーで世界の歌劇場で活躍するテノール。オーストリア出身。ウィーン少年合唱団で最初の音楽教育を受ける。ヘッセン州立歌劇場やライン・ドイツ・オペラの専属歌手を務めた後、2007年からウィーン・フォルクスオーパーに所属。17年からウィーン国立歌劇場の専属歌手として、〈魔笛〉タミーノ、〈エレクトラ〉エギスト、〈サロメ〉ヘロデ、〈ラインの黄金〉フロー、〈ヴォツェック〉大尉などを務める。近年はザルツブルク音楽祭、グラインドボーン音楽祭にも出演。23年にはドレスデンでヤノフスキ指揮〈ラインの黄金〉〈ジークフリート〉のミーメを歌い、24年にはミラノ・スカラ座でペトレニコ指揮〈ばらの騎士〉に出演。24年10月ウィーン国立音楽大学教授に就任。読響初登場。



大尉(テノール)

イエルク・シュナイダー

JÖRG SCHNEIDER, Tenor



医者(バス)

ファルク・シュトルックマン

FALK STRUCKMANN, Bass

世界で活躍する現代最高峰のバス。バレンボイム、ティーレマン、ムーティ、ペトレニコら巨匠と共演を重ね、ウィーン国立歌劇場とベルリン国立歌劇場の両劇場で「宮廷歌手」の称号を持つ。ベルリン国立歌劇場で〈ニーベルングの指環〉にすべてのバス役で出演。〈さまよえるオランダ人〉表題役、〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉ハンス・ザックスなど、ワーグナー作品で数々の名舞台を築く。そのほか〈オテロ〉イヤゴ、〈トスカ〉スカルピアなど幅広いレパートリーを誇る。メトロポリタン歌劇場、ミラノ・スカラ座、英国ロイヤル・オペラ、バイロイト音楽祭、ザルツブルク音楽祭など世界の檜舞台で歌い続けている。23年10月には読響とヴァイグレ指揮のアイスラー〈ドイツ交響曲〉で共演し、圧倒的な存在感を示した。

世界の主要劇場で活躍の場を広げるディーヴァ。英国出身。ドイツで声楽を学び、ラウリッツ・メルヒオール国際コンクールで第1位など受賞多数。これまでに〈サロメ〉表題役、〈タンホイザー〉エリーザベト、〈ジークフリート〉〈神々の黄昏〉ブリュンヒルデなどでメトロポリタン歌劇場、ドレスデン国立歌劇場、ベルリン・ドイツ・オペラに登場し、ドラマティック・ソプラノとして名声を確立している。バイロイト音楽祭など各地の音楽祭に出演するほか、R.シュトラウス〈4つの最後の歌〉などを歌いコンサートでも活躍。近年はアテネ国立劇場とパレルモ・マッシモ劇場に〈トリストアンとイゾルデ〉イゾルデで出演。24年4月東京・春・音楽祭に〈エレクトラ〉クリソテミスで読響と初共演し、豊かな美声を披露した。



©Fiona MacPherson

マリー(ソプラノ)

アリソン・オークス

ALLISON OAKES, Soprano

3/12  
定期3/15  
名曲

Artist

3/12  
定期3/15  
名曲

Artist

3/12  
定期3/15  
名曲

Artist



第一の徒弟職人 (バス)

**加藤宏隆**

HIROTAKA KATO, Bass

深くノブールな響きで幅広いレパートリーを擁するバス。東京芸術大学卒業後、米ジョンズ・ホプキンス大学ピーボディ音楽院修士課程とインディアナ大学ジェイコブズ音楽院ディプロマ課程を修了。フィレンツェでも研鑽を積む。米国ではアスペン音楽祭に2年連続で参加し、〈夏の夜の夢〉シーズンなどで出演し、好評を博した。帰国後は日生劇場〈後宮からの逃走〉オスミン、二期会〈魔弾の射手〉カスパール、〈パルジファル〉グルネマンツ、〈ドン・カルロ〉宗教裁判長などを歌い好評を博す。オペラ以外にもバッハ・コレギウム・ジャパン声楽メンバーなどを務めており、ヘンデル〈メサイア〉、モーツァルト〈レクイエム〉、バッハ〈マタイ受難曲〉など出演多数。二期会会員。

3/12  
定期3/15  
名曲

Artist

端正な歌唱と確かな音楽性で評価を得るバリトン。東京芸術大学卒業、同大学院修了。二期会オペラスタジオ優秀賞受賞。文化庁派遣芸術家在外研修員として渡独し、ベルリン・ハンス・アイスラー音楽大学大学院で研鑽を積む。ラインスベルク音楽祭〈セビリアの理髪師〉フィガロ、〈ウェルテル〉アルバールなどドイツを中心に活躍。帰国後は、二期会〈ニュルンベルクのマイスタージנגラー〉バックメッサー、〈サロメ〉ヨカナン、新国立劇場〈タンホイザー〉ピーテロルフ、日生劇場〈フィガロの結婚〉アルマヴィーヴァ伯爵などに出演した。特に〈魔笛〉パパゲーノは多くの公演で演じ好評を博している。〈第九〉やヘンデル〈メサイア〉などのソリストとしても活躍する。心から阿部ジャイアンツを応援する二期会会員。



第二の徒弟職人 (バリトン)

**萩原 潤**

JUN HAGIWARA, Baritone



©Aiko Suzuki

白痴 (テノール)

**大槻孝志**

TAKASHI OTSUKI, Tenor

堅実な役作りと美声で数々の名演奏を重ねてきたベテラン。東京芸術大学卒業、同大学院修了。イタリアとドイツで研鑽を積む。二期会〈エフゲニー・オネーギン〉レンスキーで脚光を浴び、サイトウ・キネン・フェスティバル松本〈サロメ〉、小澤征爾音楽塾〈カルメン〉、新国立劇場〈こうもり〉などに出演。デュトワやチヨン・ミョンフンらの指揮で〈エディプス王〉〈フィデリオ〉などにも参加した。読響とは2007年のロジェストヴェンスキー指揮の〈イオランタ〉(演奏会形式)、ヴァイグレ指揮の二期会〈サロメ〉ナラポート、山田和樹指揮の日生劇場〈ルサルカ〉王子などで共演。〈第九〉や宗教曲のソリストとしても高い評価を得ている。男声ユニットIL DEUメンバー。二期会会員。

確かなテクニックと豊かな音楽性で注目されるメゾ。武蔵野音楽大学卒業、同大学院修了。二期会オペラ研修所修了時に最優秀賞・川崎静子賞・所長賞受賞。ウィーン国際音楽ゼミナールを受講してディプロマ取得。全日本学生音楽コンクール第1位、日光国際音楽祭声楽コンクール大賞などを受賞。2015年〈ヘンゼルとグレーテル〉ヘンゼルでオペラ・デビュー以降、〈ナクソス島のアリアドネ〉作曲家、〈ジュリオ・チェザレ〉表題役、〈アルチーナ〉ルッジェーロ、〈コジ・ファン・トゥッテ〉ドラベッラなど多くのプロダクションに出演している。ベートーヴェン〈第九〉、バッハ〈口短調ミサ〉などのソリストを務める。今年2月には二期会〈カルメン〉メルセデスで読響と共に共演した。二期会会員。

マルグレート  
(メゾ・ソプラノ)**杉山由紀**

YUKI SUGIYAMA, Mezzo Soprano

3/12  
定期3/15  
名曲

Artist

3/12  
定期3/15  
名曲

Artist

3/12  
定期3/15  
名曲

Artist

合唱

**新国立劇場合唱団**

NEW NATIONAL THEATRE CHORUS, Chorus

1997年にオープンした新国立劇場で、オペラ公演のための合唱団として活動を開始。厳正な審査によって選ばれるメンバーは100名を超え、新国立劇場が上演する多様なオペラ公演を通じて、年々レパートリーを増やしている。個々のメンバーは高水準の歌唱力と優れた演技力を有しており、合唱団としての優れたアンサンブル能力と豊かな声量を誇る。その確かな実力で、公演のたびに共演する出演者、指揮者、演出家をはじめ、国内外のメディアからも高い評価を得ている。2007年以来、読響の〈第九〉公演に出演するほか、17年のメシアン〈アッシジの聖フランチェスコ〉、22年のブラームス〈ドイツ・レクイエム〉、23年のアイスラー〈ドイツ交響曲〉などで見事な歌唱を披露し、絶賛を博した。

東京都出身。東京芸術大学指揮科卒業。指揮を高関健、田中良和、小田野宏之に師事。東京二期会、新国立劇場、藤原歌劇団、日生劇場等のオペラ公演で副指揮、合唱指揮、コレペティートルを務めた。これまでに、〈フィガロの結婚〉〈椿姫〉〈パルジファル〉〈カルメン〉〈ばらの騎士〉〈ルル〉など、多数のオペラを手がけている。読響とは2017年の〈アッシジの聖フランチェスコ〉、22年の〈ドイツ・レクイエム〉、23年のアイスラー〈ドイツ交響曲〉などで新国立劇場合唱団の合唱指揮を務め、好評を博した。群馬響、東京シティ・フィル、東京フィル、東京響などにも客演。東京二期会音楽スタッフ、新国立劇場音楽スタッフなどを経て、19年4月、新国立劇場合唱指揮者に就任。洗足学園音楽大学非常勤講師。



音楽総合アシスタント、  
稽古ピアノ、  
合唱指揮

**富平恭平**

KYOHEI TOMIHIRA,  
Music Assistant,  
Korrepetitor,  
Chorusmaster

合唱

**TOKYO FM 少年合唱団**

TOKYO FM BOYS CHOIR, Children's Choir

1985年、FM東京の開局15周年を記念して誕生。ボーイソプラノならではの純粋な響きを追求し、小学生の男の子だけをメンバーとする世界でも稀少な少年合唱団。「クリスマスコンサート」等の主催公演には、第一線で活躍する指揮者や演奏家をゲストに迎え、意欲的なプログラムに取り組む。国内外のオペラハウスやオーケストラからの出演依頼も多く、著名な音楽家と共演する貴重な機会を得ている。様々なアーティストのCD録音や映画・ドラマ・CM音楽の録音にも参加するなど、その活動は多岐にわたる。2025年に創団40周年を迎えた。読響とは度々共演し、2017年マーラーの交響曲第3番、22年ベルクの歌劇〈ヴォツェック〉から3つの断章に出演。出演：松崎 玄（マリーの子供）、伊藤健司（子供1）、北 慎太郎（子供2）、福田莉久（子供3）、本坊瑛貴、杉本充希、菅野晟太郎、荒井雅慶、中田憲吾、石川 蒼

指導：林ゆか

3/12  
定期3/15  
名曲

Artist

3/20

横浜マチネー

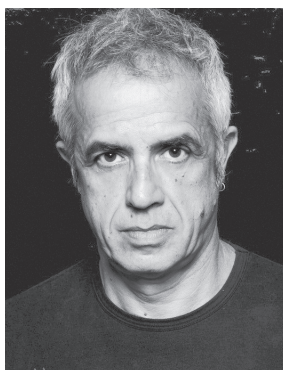
3/22

土曜マチネー

3/23

日曜マチネー

Artist



チェロ

## ジョヴァンニ・ソリマ

GIOVANNI SOLLIMA, Cello

情熱的な演奏と独創的な発想を持ち、世界各地で活躍する現代最高峰のチェロ奏者兼作曲家。1962年イタリア・シチリア州パレルモ生まれ。アバド、ムーティ、アルゲリッチ、ブルネロ、マイスキーら世界的巨匠と共演を続けるほか、作曲家フィリップ・グラスとコラボレーションを展開。古楽から現代音楽、ジャズ、ロック、民俗音楽、即興までも網羅した幅広い音楽性を誇り、音楽の根源へ迫る歴史・文化的側面からのアプローチを行っている。ソニーやデッカなど名門レーベルから多くのCDをリリース。100人のチェロ奏者を集めた奇想天外なクリエーション「100チェロ」企画を世界各地で行うなど、唯一無二のアーティストとして活動を続けている。読響とは今回が初共演。

3/20

横浜マチネー

3/22

土曜マチネー

3/23

日曜マチネー

Artist

豊かな歌心と温かな音色で魅了する日本を代表するチェリスト。2017年から読響ソロ・チェロ奏者を務めている。東京芸術大学を首席で卒業後、オーストリアのザルツブルク・モーツアルテウム音楽大学の修士課程を最高点で修了。日本音楽コンクール優勝、エンリコ・マイナルディ国際コンクール第2位など受賞多数。齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞。これまでにG. ポッセ、J=P. ヴァレーズ、モルロー、小林研一郎、山田和樹らの指揮で、ウィーン室内管やプラハ響など国内外の楽団と数多く共演し、高い評価を得ている。CDはエイベックス・クラシックスからリリースされ、ドラマや映画の演奏の他、2012年から8年間 NHK-FM「きらクラ!」のパーソナリティーを務めるなど幅広く活躍中。



©Yuji Hori

チェロ

## 遠藤真理 (読響ソロ・チェロ)

MARI ENDO, Cello (YNSO solo)

3/12  
定期3/15  
名曲

Program Notes

ベルク

歌劇〈ヴォツェック〉 作品7 (演奏会形式)

## 作曲の経緯

ウィーン生まれの作曲家アルバン・ベルク (1885~1935) は、師のアーノルト・シェーンベルクや同門のアントン・ウェーベルンと並ぶ新ウィーン楽派の代表的な存在で、生涯にふたつのオペラ〈ヴォツェック〉と〈ルル〉を残した (後者は未完成)。

1914年5月、彼は19世紀前期に早世した劇作家ゲオルク・ビューヒナー (1813~37) の戯曲『ヴォツェック』のウィーンにおける上演を観た。ビューヒナーは実際に起こった殺人事件と、この殺人のかどで処刑された人物を主人公にして戯曲を書いた。犯人の責任能力に関しては疑わしい部分も多く、精神鑑定まで行われており、解剖学や生理学を専攻した医師でもあったビューヒナーは、そこに関心を示したのだった。

ゲーテの活動の晩年とちょうど重なる時期に創作を行い、20代半ば、若くして亡くなったビューヒナーは、自然主義や表現主義の先駆者として知られるが、生前に発表された作品は1作のみで、あとはすべて死後の出版となる。再評価が進んだのはようやく19世紀末から20世紀初頭にかけてのことで、ベルクが『ヴォツェック』を観た当時、この戯曲はいろいろな都市で上演されていた。現在のウクライナ南西部に当たるガリツィア生まれのユダヤ人、カール・エミール・フランツォースの解読によって1875年に『ヴォツェック』として出版された戯曲は、その後、パウル・ランダウによって誤読と改竄を修正され、1901年、新たに出版された (ランダウ版)。これは1913年にインゼル文庫に加えられて、一般読者の手に届きやすくなっていた。ベルクの持っていたのもこのインゼル文庫版である。

『ヴォツェック』の舞台を観たベルクは、さっそくこれを用いた自らのオペラの構想を練り始める。ランダウ版の『ヴォツェック』は、フランツォース版とは異なった配列が施されて辻褄の合った25の場から構成されていたが、ベルクはその配列をほとんど崩さずに16場を選んで、複数の場をつなげたり大幅にカットしたりという作業の末、5場ずつの3つの幕からなる台本を完成させた。1921年には、手稿の新たな解読により、原作の主人公は「ヴォツェック Wozzeck」ではなく「ヴォ

3/12  
定期3/15  
名曲

Program Notes

イツェック Woyzeck」であることが判明していたが、ベルクはあえて「誤読」の「ヴォツェック」の名を残している。ちょうど第一次世界大戦をはさむ時期に〈ヴォツェック〉の創作は始まったわけだが、この戦争に一時期ながらベルクは徴兵されたため、そのときの体験がオペラに反映されることにもなった。オーケストレーションが終わるのが1922年であり、こうして、表現主義の傾向を持つ代表的なオペラ〈ヴォツェック〉が誕生したのである。

台本作成の際のベルクの方針は明らかである。彼は全体をヴォツェックとマリーの悲劇としたかった。それゆえ、他の主要な人物 (アンドレス、医者、大尉、鼓手長) は、あくまでもふたりの主人公との関係性でしか登場せず、余計な場面は削除された。第1幕は人物ひとりひとりをヴォツェックとの関係で紹介し、ヴォツェック自身が登場しない第5場で、マリーと鼓手長の間を描写し、第2幕のドラマの発展へと結びつけている。第2幕第5場も、マリーを奪った鼓手長とヴォツェックの場面となっており、ここで叩きのめされたヴォツェックがマリーの殺害を考えはじめ、それは第3幕での実行へつながっていく。ベルクのこだわりを表すのは、3つの幕がともに、形は異なるものの同じ和音で終わっていることであり、それにもかかわらず、ドラマ上は期待させるような次の幕への連続性が示されている。こうして3幕は緊密な連関の内に置かれているのである。

## あらすじ

## 【第1幕】

実直な兵卒ヴォツェックは、内縁の妻マリーとの間にひとりの息子をもうけている。貧しい生活を強いられているなか、彼は尊大だが小心者の大尉のヒゲを剃ったり、誇大妄想気味の医者の人体実験のモルモットになったりして小銭を稼ぐ。教会に認められた夫婦でないために洗礼を受けられない子供をもうけたことを大尉は責めるが、ヴォツェックは金のない惨めさを痛切に訴えるだけである。精神的に不安定な彼は、野で草を刈っている最中に不気味な幻覚を見て、妄想に苛まれ、友人のアンドレスを驚かす。マリーは、そんなヴォツェックとの生活に疲れ、猛々しい肉



体の持ち主である鼓手長に惹かれる。鼓手長の方もまんざらではない。ある晩、とうとう鼓手長はマリーをモノにする。

### 【第2幕】

信心深いマリーは鼓手長との関係で悩むが、彼がくれた耳飾りには喜びを隠せない。その姿を見て、ヴォツェックは不信感を募らせる。周囲はすでにマリーと鼓手長との関係に気づいており、ヴォツェックはその件で大尉と医者にからかわれる。マリーを問い詰めて、しらを切られるヴォツェックだが、猜疑心は収まらない。居酒屋でマリーが鼓手長と嬉しそうに踊っている現場を目撃した彼は、自慢話をする鼓手長に兵舎で反抗するが、力では敵わず、打ちのめされていっそう惨めになって、マリーの殺害を考え始める。

### 【第3幕】

マリーは自分の罪を悔いて神に祈る。沼の畔で、異様に紅い月が昇るなか、すでに錯乱気味のヴォツェックはマリーを殺害し、凶器のナイフを捨てて逃げる。苦しみを紛らわそうと酒場で遊ぶ彼だが、血の付いた袖を見咎められ、一目散に殺害現場に戻る。証拠のナイフを沼の奥深く投げ入れようとする彼は、誤って溺れ死ぬ。翌朝、見つかったマリーの死骸を子供たちは見に行こうとするが、残されたヴォツェックとマリーの子供だけは訳も分からずに、ひとりハイドオドオとおウマごっこに浸る。

## 曲目解説

〈ヴォツェック〉は無調オペラの代表ではあるが、もちろんこの様式による初めての作品ではない。彼は1910年代から存在する無調オペラ、例えばシェーンベルクの〈期待〉や〈幸福の手〉といった作品、そしてその他の作曲家の作品を検討することができる立場にいたわけで、それはドラマ構成上で必要ならば、調性的な音楽もあえて採り入れるという折衷的な方法を採用することへとつながった。もともとベルクの作風は新ウィーン楽派のなかでも調性との親和性が高いものであったが、それによって〈ヴォツェック〉は、彼のほかの作品にすらないような、明確な調性部

分を含むことになった。

顕著なのは、劇中歌になっている箇所、第1幕第2場でのアンドレスの歌、第3場のマリーの子守歌、第2幕第4場の民謡の合唱などである。さらにもう1箇所、第3幕第4場と第5場を結ぶ間奏曲も、二短調による代表的な調性部分である。実は、ここにはベルクがはるか以前、シェーンベルクのもとで修業していた時代、すなわちまだ調性を用いて作曲していた時代に創って未完に終わっていた二短調ソナタ楽章の断片が転用されている。ここはマリーとヴォツェックの両者が死んだあとの、いわば悲劇のカタルシス的な役割を担う、非常にロマンティックな部分である。だが、〈抒情組曲〉やヴァイオリン協奏曲、そしてオペラ〈ルル〉で私生活における女性関係を音名象徴や数による象徴で作品に投影することの多かったベルクの性向からすると、ここも非常に意味ありげに聞こえる。もしかすると、ここにはベルクが青年時代に愛し、過ちでベルク唯一の子アルビーネを宿した、女中マリー・ショイフルへの個人的な思い出が込められているのかも知れない。少なくとも、〈ヴォツェック〉の登場人物であるマリーに、ベルクの私生活における「マリー」の姿が投影されていることは疑われていない（祝福されない子供がいるという点も共通する）。ビューヒナーの原作には、古典劇の手法であるカタルシスの要素は認められないが、ベルクはこのオペラにそれを取り入れて、古典的なドラマの体裁を与えている。

ベルク自身が自慢げに語っていたように、〈ヴォツェック〉のそれぞれの場には、ドラマの性格に合わせて、すべて器楽の形式が当てはめられている。各登場人物が紹介される第1幕全体は、それぞれの「性格」を表すような5つの性格的小品（第1場はバロック時代の組曲、第2場はラプソディー、第3場は行進曲と子守歌、第4場はパッサカリア、そして第5場はロンド）になっている。劇的な要素がお互いに緊密な連関を伴いながら急速に展開していく第2幕は、5楽章制ながら、第1場をソナタ形式にする古典派時代の交響曲。ドラマが収束に向かう第3幕は、第4場と第5場の間の間奏曲をもひとつの場としてカウントした6つのインヴェンションである。このように、各幕に大きな形式的枠組みが当てはめられており、それが

3/12  
定期3/15  
名曲

Program Notes

オペラ全体に驚くべき緻密な構造を与えている。ただ、それらの形式は耳で聴き取れるものではない。〈ヴォツェック〉のドラマとしての統一は、むしろ聴いてそれと分かるライトモチーフの多用によっている。ワーグナーの楽劇同様、聴き取りやすい音のつながりがあちこちにちりばめられており、それらを聴き取って、そのドラマ上の意味を理解するのは、さほど難しいことではない。

声楽書法も、歌と語りを合わせたような、ワーグナー風のシュプレヒゲザングが基礎に置かれ、対話部分のほとんどを構成しているが、同時にシェーンベルク流の、より語りに近く独特の記譜法が用いられたシュプレヒシュティンメの手法も採用し、さらにはそのシュプレヒシュティンメと完全な歌との中間の形態まで採り入れて、微妙な変化を伴う繊細な歌唱パートが創られている（これらの歌唱法の違いを完璧に区別して演奏するのは至難の業である）。また、各場をつなぐ間奏曲が両端の場を緊密に結び合わせ、次第に（あるいは第3幕第2場と第3場との間奏曲におけるように、口（シ）の音の2回の持続だけで瞬時に）次の場の雰囲気へと転換させたり、次の場を予告したりする重要な役割を担っているが、これはドビュッシーの〈ペレアスとメリザンド〉からベルクが学んだ手法である。

音楽面を見るならば、〈ヴォツェック〉は20世紀の20年代までにベルクが知り得た、さまざまなオペラ手法の折衷、言うなれば「いいとこ取り」でできあがっているが、それらに対するベルクの技術的力量的高さゆえに、ドラマとしての大きな完成度を得ている。どの細部をとっても、入念な磨き上げとドラマとの周到的な連関作りが、ほとんど偏執狂のように施されており、知れば知るほどぞら恐ろしい作品に思えてくるのが、〈ヴォツェック〉というオペラである。

〈長木誠司 音楽評論家〉

作曲：1914～22年／初演：1925年12月14日 ベルリン／演奏時間：約95分  
楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ4（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット4（エスクラリネット持替）、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット4、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、シロフォン、鞭、銅鑼）、ハープ、チェレスタ、ピアノ、弦五部、バンダ（ヴァイオリン2、クラリネット、アコーディオン、ギター、チューバ）

一柳 慧

## オーケストラのための〈共存〉

大阪市制100周年（1989年）記念事業の計画を契機に、同市と国とで合意し、90年に「国際花と緑の博覧会」を開催する運びとなった。80年代後半のバブル景気を如実に反映し、民間企業からの寄付金総額も万博史上最大を記録した。

同博覧会記念協会は1993年から、「自然と人間との共生」なる万博の理念の発展に寄与する人物に対し、コスモス国際賞を授与している。協会はたびたび、この賞の祝典曲を一柳慧（1933～2022）に委嘱した。その結果、「共存」シリーズともいうべき一連の管弦楽曲が誕生する。

龍笛、笙、オーケストラのための〈コスモス・セレモニー〉（1993年。協会では〈共存I〉とする）、尺八と弦楽オーケストラのための〈共存〉（1994年）、オンド・マルトノとオーケストラのための〈共存〉（1996年）、オーケストラのための〈共存〉（1997年）などがそうだ。

一柳はこのシリーズの前後にも、「共存」というコンセプトで作曲をしている。1992年にはマリンバとピアノのための〈共存の宇宙〉を、2008年には復元楽器のための〈共存2008〉を世に出した。作曲者にとってこの概念は、継続したりアリティも持っていたようだ。

興味深いのは一柳が、コスモス国際賞祝典曲としてのシリーズに先立ち、〈共存の宇宙 Cosmos of Coexistence〉において「コスモス」と「共存」とを結びつけている点である。作曲家の頭には「宇宙」における「共存」の思考があり、それを92年に音楽化したのち、たまさか「コスモス」の名を冠した機関から委嘱をうけ、「自然と人間との共生」なる賞の理念とみずからの「共存」の概念を、強く共鳴させたのではないか。

このたびはそのうち、1997年のオーケストラのための〈共存〉を演奏する。10分にも満たない小品ながら、作曲家の執心した「Coexistence」が音として鳴り響く。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1997年／初演：1997年11月3日、大阪／演奏時間：約6分  
楽器編成／フルート（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット、ティンパニ、打楽器（大太鼓、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、カウベル、フレクサトーン、銅鑼）、弦五部

3/20  
横浜マチネー3/22  
土曜マチネー3/23  
日曜マチネー

Program Notes

3/20

横浜マチネー

3/22

土曜マチネー

3/23

日曜マチネー

Program Notes

## ソッリマ

## 〈多様な大地〉(日本初演)

「ミュージシャン・コンプレ」(仏)という言葉がある。日本語に訳せば「完全なる音楽家」。作曲・演奏・研究・教育と、音楽をめぐるあらゆる分野に精通する人物を指す。ただ“できる”というのではなく、“精通”していることが重要で、古くはバッハなどがその典型である。

今日では各分野の専門化が進んだ。それでもなお「ミュージシャン・コンプレ」と呼びたくなる傑物はいらる。イタリアのチェロ奏者ジョヴァンニ・ソッリマ(1962～)もそのひとりだ。シチリア島のパレルモ生まれ。父親も兄弟もみな同業の音楽家一家に生を受け、同地の音楽院でチェロを学ぶ。その後、ザルツブルクのモーツァルトウムでも修練を続け、シュトゥットガルト音楽大学に移ってから作曲に本格的に取り組みだした。こうして演奏と作曲の両輪が、同時に回り始める。

教育に関しては、イタリア北部ブレシアで教鞭を取り始めたのを嚆矢とし、現在はローマのサンタ・チェチーリア国立アカデミーでチェロのレッスンを受け持っている。

〈Terra con variazioni〉は、ソッリマが2015年にミラノ万博のイベント用に書き上げた。はじめにそのタイトルを検討してみることにしよう。

まずはこれが、西洋音楽でかねて用いる「Tema con variazioni」(たとえば、ベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ 作品12-1 第2楽章)の洒落であることを見逃してはならない。後者が「テーマと変奏(主題と変奏)」である以上、前者は「テマと変奏(大地と変奏)」ということになる。

実際、曲の作りも「主題の提示→いくつかの変奏→主題の回想」と、伝統的な「Tema con variazioni」のスタイルだ。編成は独奏チェロと管弦楽。単一楽章のチェロ協奏曲の体裁をとる。

冒頭、ヴァイオリン声部が同じ和音を弾き続けるのはミニマル・ミュージック風。その基盤の上でファゴットが「ニホヘト……」と旋律を吹き始める。どこか東欧の民謡にも聴こえるこのメロディーが、変奏曲の主題の一部。独奏チェロが改めてこの主題を印象付けたあと、変奏部分へと入っていく。

民俗舞踊を思わせる7拍子、おもにクラリネットと独奏チェロとで楽句をやりとりするプレストと続き、独奏チェロで始まるレントを挟んで、目まぐるしく拍子の変

わるアレグロへ。音域を広く取って上下するアンダンテの最後にティンパニのドラムロールが鳴り響き、カデンツァに入る。やがて人間の声が独奏チェロに重なる。ほどなくして快速に。そして主題を壮大に統合していく。同じ音型を繰り返しながら、音量も速度も徐々に増していき、一気に呵成に曲を閉じる。

## ソッリマ

## 〈チェロよ、歌え!〉

ソッリマを演奏家として、また作曲家として有名にしたのは、2つの独奏チェロと弦楽合奏のための〈チェロよ、歌え!〉だろう。このタイトルは、作曲者のザルツブルクにおける師、アントニオ・ヤニグロの言葉から取られた。ソッリマはこの曲を、ヤニグロ門下の兄弟子であるマリオ・ブルネロに献げている(つまり当初、ブルネロとふたりで独奏を受け持つことを想定していた)。

作曲は1993年。97年にブルネロが同名の録音盤『チェロよ、歌え!』でタイトル作品に取り上げたことで、ソッリマの名前は作曲家としても演奏家としても世界中に広まった。

〈チェロよ、歌え!〉は先述の通り、二つの独奏チェロと弦楽合奏のための曲。単一楽章制をとる。

短音で同じ音を繰り返すミニマル・ミュージック風の運びに、長音が緩やかに上下しつつ寄り添う。やがて独奏チェロ群が民俗音楽風の楽想で互いを模倣するように登場すると、伴奏は上拍がち(裏打ち)に。独奏群がタスキ掛けの要領で音域を大きく上下する音型を弾くところから、速度が緩む。ミニマル・ミュージック風の運びを取り戻したのち、独奏群の伸びやかなタスキ掛け、上拍がちのリズムを経て、改めてタスキ掛けの楽想を回想する。徐々に響きを細くしていき、やがて消え入るように「*pppp*」で曲を終える。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

【多様な大地】作曲：2015年/初演：2015年4月30日、ミラノ/演奏時間：約23分  
楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、ティンパニ、弦五部、独奏チェロ  
【チェロよ、歌え!】作曲：1993年/初演：1994年、パレルモ/演奏時間：約12分  
楽器編成/弦五部、独奏チェロ2

3/20

横浜マチネー

3/22

土曜マチネー

3/23

日曜マチネー

Program Notes

3/20

横浜マチネー

3/22

土曜マチネー

3/23

日曜マチネー

Program Notes

## ベートーヴェン

## 交響曲 第7番 イ長調 作品92

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)の交響曲第7番と第8番は、作曲時期(1812年前後)が重なることから「ふたごの交響曲」とされる。

2曲は年長のふたご、交響曲第5番と第6番の残したいくつかの音楽的課題を解決するために生まれた。第5番と第6番でベートーヴェンは、短い音型(動機)の徹底的な展開に成功したが、その副作用として美しく流れる旋律を犠牲にした。

動機の徹底的な展開を残しつつ、美しく流れるような旋律を響かせるにはどうすればよいか。ベートーヴェンが到達した答えは舞曲だ。舞曲は舞踏の音楽で、それぞれのダンスのステップに合わせて拍子やリズムが設定される。それに乗せ、ときに流れるような、ときに荒ぶるような旋律が奏でられる。ベートーヴェンはそこに目をつけ、第7番と第8番を書き上げた。

だから両者は「ふたごの交響曲」というよりも「ふたごの組曲」と言ったほうがよい。第7番のそれぞれの楽章はジグ・マーチ・スケルツォ・コントルダンス、第8番はクーラント・エコセーズ・メヌエット・プレの各舞曲を下敷きとする。バッハの鍵盤組曲集に倣い、第7番と第8番をそれぞれ、ベートーヴェンの「イギリス組曲」と「フランス組曲」としても、大方の賛同は得られよう。

**第1楽章** 和音の強奏で始まる堂々とした序奏の後、ジグ(長短短韻律の3拍子系舞曲)のリズムが特徴的な主部に入る。

**第2楽章** 重々しい長短短リズムが耳をひく葬送行進曲。このリズムは吊いの行列を表すとともに、古来、英雄を示す韻律であったことも忘れてはならない。

**第3楽章** “速すぎる”3拍子のスケルツォ。ここまで聴き手が身体に刻んできた舞曲の律動を、ここでいったん解体する。

**第4楽章** イギリス発祥の舞曲コントルダンス。主題はアイルランド民謡から。飛び上がり、すくとんと落ちる運動性を持つ音楽が、聴き手の身体に改めてリズムを刻みつける。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1811～12年／初演：1813年12月8日、ウィーン／演奏時間：約36分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部